

(122)

說あれど不分別にコシジロクロハミチと云あり之なる
か (未完)

●顔面神経は果して單純運動性なるか

(東京醫學會雜誌第十七卷第七號所載)

本研究は東京醫學大學助手森田齊次氏の爲せる處にして
第一に魚類「ガイコツ」鯊、富士鯨、鯉に於ける顔面神経
の解剖を詳述し第二に兩棲類、爬虫類、哺乳動物又殊に
人體顔面神経と比較し最後に概括を載せたり
魚類の顔面神経に就いて氏は左の如く記せり

「魚類の顔面神経は知覺感覺(味感)及び運動性器官に分
布する混合性神経なるを知るを得べし而して此知覺感覺
及び運動性各神経纖維は顔面神経に根元的に混有する成
分にして敢て他の腦神経との吻合を要せざるものゝ如し
何となれば知覺性口蓋神経は鯊に於ては三叉神経と吻合
したる後分歧すると雖も其吻合枝は口蓋神経の全成を送
出すものにして比較的細小に過ぎ殊に鯉に於ては他の神
経と末梢性吻合を營まざる以前に口蓋神経を分枝するを
見れば知覺口蓋神経は顔面神経の本來に混有する神経纖

維ならん口腔底粘膜に分布する神経即ち高等脊椎動物の
鼓索神経に比較すべき神経は鯊の如き三叉神経のみと吻
合する場合に於ても存在するを見れば恐らくは此成分も
顔面神経に根元より具有するものならん」

氏の結論に依れば「(一)大體に於て人間の顔面神経は下
等脊椎動物の其れに一致するものにして余はデクソン氏
の "The facial nerve in man is in a condition comparable
with that which obtain in lower animals" に賛成す(二)
人間の顔面神経は下等脊椎動物に於けるが如く本來に知
覺感覺(味覺)及び運動性纖維を混する混合性神経なら
ん」とあり

●神経の傳達作用に關する研究

(神經學雜誌第二卷第一號所載)

文學博士元良勇次郎氏の研究にかゝるものにして博士の
自記にかゝる本論文の要概は即ち左の如し

此研究の目的は神経の傳達作用を水力學の理によりて説
明せんとするにあり其方法としてゴム管に水を入れ其一
端を打ち波動の他端に傳はるの法則を研究して之れを神